

詩篇 136 篇

《初めの感謝》

- 1 主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。
- 2 神の神であられる方に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。
- 3 主の主であられる方に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。

《天地創造》

- 4 ただひとり、大いなる不思議を行われる方に。その恵みはとこしえまで。
- 5 英知をもって天を造られた方に。その恵みはとこしえまで。
- 6 地を水の上に敷かれた方に。その恵みはとこしえまで。
- 7 大いなる光を造られた方に。その恵みはとこしえまで。
- 8 昼を治める太陽を造られた方に。その恵みはとこしえまで。
- 9 夜を治める月と星を造られた方に。その恵みはとこしえまで。

《出エジプト》

- 10 エジプトの初子を打たれた方に。その恵みはとこしえまで。
- 11 主はイスラエルをエジプトの真ん中から連れ出された。その恵みはとこしえまで。
- 12 力強い手と差し伸ばされた腕をもって。その恵みはとこしえまで。
- 13 葦の海を二つに分けられた方に。その恵みはとこしえまで。
- 14 主はイスラエルにその中を通らせられた。その恵みはとこしえまで。
- 15 パロとその軍勢を葦の海に投げ込まれた。その恵みはとこしえまで。

《荒野の旅とカナン征服》

- 16 荒野で御民を導かれた方に。その恵みはとこしえまで。
- 17 大いなる王たちを打たれた方に。その恵みはとこしえまで。
- 18 主は力ある王たちを、殺された。その恵みはとこしえまで。
- 19 エモリ人の王シホンを殺された。その恵みはとこしえまで。
- 20 バシヤンの王オグを殺された。その恵みはとこしえまで。

《カナンでの生活》

- 21 主は彼らの地を、相続の地として与えられた。その恵みはとこしえまで。
- 22 主のしもべイスラエルに相続の地として。その恵みはとこしえまで。
- 23 主は私たちが卑しめられたとき、私たちを御心に留められた。その恵みはとこしえまで。
- 24 主は私たちを敵から救い出された。その恵みはとこしえまで。

《終わりの感謝》

- 25 主はすべての肉なる者に食物を与えられる。その恵みはとこしえまで。
- 26 天の神に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。

「大ハレル」（賛美の大詩篇）で知られる本篇は「交唱形式」になっており、各節の後半がすべて「**その恵みはとこしえまで**」という句で統一されています。これを「単調」と酷評する人もいますが、一定の響きをもって連呼されることの美を見出すこともできるでしょう。これが実際の礼拝の場で歌われたとすると、前半部を聖職者が、後半部を会衆が唱えることで、相互に掛け合う「交読文」「交唱歌」となったことが想像できます。

本篇の構造は大きく分けると以下のように整理することができます。

- ① 1～3 節：神の性質（主権性）
- ② 4～24 節：神の御業（創造と救済）
- ③ 25～26 節：神の御業（継続性）

①神の性質

この部分を本篇の「序論」と言ってもよいでしょう。4 節以下で展開される「神の御業」の前提として、それらの行為をなさる神がどういうお方であるかが描かれているのです。1～3 節の中から、「**いつくしみ深い**」（1 節）、「**神の神**」（2 節）、「**主の主**」（3 節）というワードを拾い上げてみましょう。ここでは「他の神」「他の主」が想定されているわけではなく、聖書全体の思想から「**唯一の神**」が如何なるお方であるかが前提として据えられています。それはいつくしみ深い方であると。原語で使われている「**רַחֵם**／へセド」には「善」「親切」「忠実」という意味のほか、「一方的に契約を守る」という神の根本的な性質が含まれています。不忠実な人間に対して忠実であり続ける神。罪なき神であるからこそそのようにあり続けることができるのです。

②神の御業

この部分は本篇の「本論」とも言えるところで、大きく四つの内容で構成されています。

(1) 天地創造（4～9 節）

「**天**」（5 節）、「**地**」（6 節）、「**光**」（7 節）、「**太陽**」（8 節）、「**月と星**」（9 節）と、大雑把ではありますが創世記 1 章の内容がまとめられています。ここでは、動植物や人間についての言及が省かれています。それらが生きるための土台が築き上げられたのです。つまり、生きとし生けるものは神の創造の恵みを受けて存在しているということでしょう。

(2) 出エジプト（10～15 節）

多くの民族の中からイスラエル民族が選ばれ、神の恵みを世に現すべき存在として立てられました。しかし、この民は四百年に亘ってエジプトで奴隷とされ、辛酸を舐めることとなります。その苦境から救い出し給う神の御業が描かれていきます。神

はモーセを通して不思議な御業を行ない、エジプトへの主権を示されたのです。「**エジプトの初子を打たれた**」(10 節)、「**葦の海を二つに分けられた**」(13 節)、「**パロとその軍勢を葦の海に投げ込まれた**」(15 節)と、ここでも「十の災い」の多くは割愛されていますが、イスラエルの神が追撃者から民を守られたことが少ないことばで想起されています。

(3) 荒野の旅とカナン征服 (16～20 節)

次は、エジプトを出た民が四十年に亘って荒野を放浪したとき、カナンの地に入るまでの道においてすべての敵を打ち破ってくださったことが、これまた限られた出来事をもってまとめられています。代表名として「**エモリ人の王シホン**」(19 節)と「**バシャンの王オグ**」(20 節)だけが挙げられています。シホンはイスラエルの民が自国を通過するのを許さず(申命 2:26-37)、オグも民族を挙げてイスラエルの行進を止めようとしたが(申命 3:1-11)、いずれも滅ぼし尽くされてしまいました。両者ともイスラエルを好意的に見送っていれば……。

(4) カナンでの生活 (21～24 節)

紆余曲折はありましたが、主の憐れみによってイスラエルの民は目的地カナンに到着します。指導者はモーセからヨシュアにバトンタッチし、若い力でもってカナンの地を次々と征服していきました。そして、土地は十二に分割され、各部族に与えられます。「**相続の地**」(21, 22 節)ということばが繰り返されていますが、これは各部族にとって重要な意味を持っていました。それは、子孫がその土地に住む権利を有するという、神が与え給うた地として守り続けなくてはならないということです。さながら、「カナン」はキリスト者にとっての相続地、永遠の神の国を思わせるものです。

③25～26 節：神の御業

最後の二節は本篇の「結論」に相当するでしょう。ここではまとめとして何が語られているか。「**主はすべての肉なる者に食物を与えられる**」(25 節)とあるように、再び創造の御業が思い起こされ、更に最初のところでは登場しなかった「**すべての肉なる者**」が出てきます。そう、生きとし生けるものは神の創造の摂理の下で恵みによって生かされているのであり、地のあらゆるものを食物とすることが許されています。神を知る者は、自分を養い給う神に感謝し、賛美をささげる。神を知らない者も、同様に神に養われていることに目が開かれるように。そうでなければ誰に感謝して生きるのでしょうか。聖書に描かれた人格的な神との交わりに生きる者は、誰に向かって賛美しているかを知っています。本篇はこのように、すべての人に対する賛美への招きで始まり、やはり賛美への招きによって締めくくられるのです。